# 祝福の鐘

吹雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
祝福の鐘

【Ｎコード】
Ｎ６０１０Ｏ

【作者名】
吹雪桜

【あらすじ】
王太子と二人の従妹。
いつしか芽生えた恋情が三人を二人と一人にする。
それぞれの視点で全四話。

# 前編

「ラージ兄様」

そう呼ぶのは父の妹たる人の一人娘、マリィアだ。

「ヴィ」

そう呼ぶのは父の妹たる人の娘、フィリアだ。

マリィアとフィリアの母は双子の姉妹だった。そのためか、二人は姉妹と見間違うほどによく似ていた。
その二人の従兄であるヴィンラージは、血の繋がりが分からないほど、二人と似通うところがなかった。
それでも従兄。三人は仲が良く、幼少期は共に遊び、青年期に入っても時々は一緒に日々を過ごしていた。

マリィアとヴィンラージの婚約が決まるまでは。

見つけた。
ヴィンラージは探し人の姿を見つけ、名を呼ぶ。

「フィリア」

声に振り向いたフィリアは、母親譲りの緑の目でヴィンラージを映す。金の髪がさらりと揺れた。

「ヴィ。どうしたの？」

「お前の様子が可笑しいからだろうが」

他の誰も気づかないこと。そうあるようにフィリアが振舞っているのだから当然だが、それにヴィンラージが騙されたことはない。騙されるつもりもない。

それを知るフィリアはくすりと笑う。

「あら、やっぱりヴィには分かってしまうのね」

「吐け」

「…どういう聞き出し方？もう」

そんなだから怖がられるのよ？と続けるフィリアは、だからどうした、と言わんばかりの従兄の態度に肩をすくめる。

顔の造作はいいのに、基本無表情、無口のこの従兄。集う女性は数あれど、その全てがその冷たい視線に臆してしまう。そのせいで冷たい、怖い。そう噂されているのだ。

長い付き合いのフィリアは知っている。ヴィンラージが優しいこと。温かいこと。だから時々違うのだと言いたくなる。言ったところでヴィンラージの態度が変わらない以上、意味のないことだから言わないのだけれど。

「フィリア」

そんなフィリアにヴィンラージはむっとしたように名前を呼べば、ふふ、と笑い声。

「大したことじゃないの。ただ少し先のことを考えていただけ」

「先？」

そう、先、とフィリアが目を伏せる。

その姿に何故か心の臓が冷えた心地がしたヴィンラージが口を開く。

フィリア、そう呼ぶために。

けれど少し強く吹いた風にフィリアの髪が流れると、フィリアが目

を開けた。ヴィンラージが口を閉ざすほどに強く、何かを決めた目を。

「ねえ、ヴィ。マリィを幸せにしてあげて」

ヴィンラージが返すのは沈黙だ。
つい先日決まった婚約者。ヴィンラージとフィリアの従妹。ずっとずっと一緒にいた大切な従妹。
なのにヴィンラージは頷かない。フィリアの目を見返すも、頷かない。

「ね？」
「不幸にはしない」
「…幸せに」
「不幸にはしない。それ以外は頷かない」
「ヴィ」

硬い表情のフィリアは、けれど苦しそうに目を揺らした。そう答えるヴィンラージの気持ちを察することができるからだ。だからそれ以上は言えない。強要など、できない。

「フィリア」
「ええ」
「愛している」
「…っ」
「愛している」
「…私も、愛してるわ」

重ねた唇はこれが最初で最後。
もっと早くに口に出せばよかった。互いの気持ちはとっくに分かっ

ていたのだから。

もう、共にはいられない。

鐘が鳴る。

祝福の鐘が鳴る。

白いドレスを身に纏って歩いた従妹。行き着く先で待つ従兄。それを微笑んで祝福した。

従妹は幸せそうに笑っていて。向かい合う従兄は無表情で、従妹を通り越してこちらを見ていた。

祝福の歌が流れて。

祝福の声が注がれて。

二人の婚姻が為された瞬間、唇に触れた。愛する人の唇と重ねた唇。

目を伏せる。

幸せになって、マリィ。

幸せにして、ヴィ。

その気持ちに嘘なんてないのよ。

鐘が鳴る。
祝福の鐘が鳴る。
流れる涙は何の意味を含んでいるのだろうか。

鐘が鳴る。
祝福の鐘が鳴る。
この鐘を、自分のためには生涯聞かない覚悟を決めたことを、今はまだ誰にも言っていない。

## 中編

本当は知っていた。ヴィンラージとフィリアが想いあっていることを。
マリィアがヴィンラージの婚約者になったために二人は従兄妹のままでいるしかなくなったことを。
知っていた。知っていたけれど、マリィアはヴィンラージが好きだった。誰にも渡したくなかった。だから頼んだのだ、両親に。
ヴィンラージが好きなのだと。一緒になりたいのだと。

そうしてヴィンラージはマリィアのものになった。たった一人の夫となった。
たとえ大切な従妹が影で泣いていても、最愛の夫がこちらを想ってくれなくても満足だった。
娘が生まれて、息子も生まれて。それでもヴィンラージがマリィアと同じ想いを返してくれることはなかったけれど、

幸せですか？
幸せよ、私は。

そう答えられるくらいには幸せだった、のに。

「…もう一度言って」
震える体。それを叱咤して、目の前で跪く男に言えば、男は顔を伏せたままマリィアに再度告げる。
「ヴィンラージ殿下の生死が不明との報告が入りました」

「嘘！」
悲鳴のように声を上げる。
生死が不明？ヴィンラージの生死が、分からない？
「マリィア様」
「だって、だって帰ってくるって…！戦争には勝ったんでしょう！？」
「はい」
「なのにどうして…！！」

戦争に行くと言ったヴィンラージ。
必ず帰ってきてと言ったマリィアに、ああ、と頷いたヴィンラージ。
戦争に勝ったのだという報告に国は湧いて。マリィアも歓喜して。
ヴィンラージが帰ってくる。約束通り帰ってくるのだと安堵して。
なのに、帰ってこない、だなんて。

「ああ…！！」

泣き崩れるマリィアに、誰もが悲痛な表情で唇を噛んだ。

ヴィンラージの生死が判明しないまま、十年の時が過ぎた。
当時六歳だった娘は隣国に嫁ぎ、三歳の息子は王太子だったヴィン

ラージに代わって王太子を継いだ。
マリィアはまだ年若い息子を支えながら、今もまだヴィンラージを想い続けていた。
そんなある日のことだ。娘から手紙が届いた。

もしかしたら、お父様かもしれません。

夫について訪れた国で、その姿を見たのだと。はっきりと断言することはできないけれど、記憶の残る父の姿に似ていたのだと。そしてその隣には母であるマリィアによく似た女性がいたのだと。

それを読んで一番初めに思ったことは、ああ、そうだったのか、だ。
マリィアによく似た女性。ヴィンラージが隣に置く女性。そんな女性は一人しか思い浮かばない。フィリアだ。
フィリアはマリィアがヴィンラージと結婚して一年後、姿を消した。
フィリアの両親は行方を知っているようだったが、ヴィンラージがどんなに問い詰めても頑なに語らなかった。
だからヴィンラージもそれ以上問い詰めることを諦めた。そしてフィリアの行方を探す素振りもなかった。

諦めたのだと思っていた。
フィリアのことは心配だったけれど、行方を彼女の両親が知っているのならば大丈夫だと思った。
そして安堵した。ヴィンラージの手が届くところにフィリアはいない。万に一つの間違いも起こらない。

とんだ思い違いだ。

ヴィンラージは知っていたのだ。フィリアがどこにいるのか、それを知っていたのだ。

どうやって知ったのだろう。フィリアの両親から聞き出したのだろうか。マリィアに気づかれないように探していたのだろうか。分からないけれど、ヴィンラージはフィリアの居場所を知っていた。そして追いかけていったのだ。後継者だけ残して、そうしてフィリアを手に入れるために全てを捨てて追いかけていったのだ。

分かっていた。私は幸せだった。
分かっていた。ラージ兄様は私を愛していなかった。

マリィアは娘の手紙を手にしたまま、窓から見える空を見上げた。流れる涙は、どんな意味を含んでいるのだろうか。分からないけれど、マリィアは目を伏せた。

## 後編

「ラージ兄様」

朝早くに山菜を摘みに出た森の中、捨てた妻に会った。
十年。随分長い間見つかることがなかったとはいえ、それは絶対ではない。いつかは見つかるだろうと思っていたから然程驚きはしない。
フィリアと暮らす家ではなく、ヴィンラージが一人になる時を狙って現われたのは気遣いなのか。それとも恐れからだろうか。
そんなことを思いながら、妻の顔ではなく、女の顔で昔の呼び名を口にしたマリィアに、ヴィンラージは顔色一つ変えずにああ、と言う。

「久しいな、マリィ」
「兄様！他に言うことはないの！？」
「他に？何を？」
「兄様！！」
悲鳴のような叫び。それに心は動かない。
大切な従妹だった。厭ったことはない。けれどヴィンラージは決めた。フィリアが姿を消した時、硬く硬く心に決めたのだ。
「お前との結婚、後継ぎ。義務は果たした」
「義、務？」
「そう、義務だ」
マリィアが目を見開いた。
彼女は何をしにきたのだろう。ヴィンラージを連れ戻しにきたのだろうか。それとも真実を知りたくてきたのだろうか。
真実。彼女にとっては優しいものなど何一つない真実。

「お前は私でないと嫌だと言った。お前の両親はその願いを叶えようと働きかけた。私の両親は受諾した。私の反論は封じられた」

もう決めたのだと。

フィリアとマリィア以外の女性を寄せ付けない息子に、良縁だと両親は言った。マリィアのことは従妹としてしか見られないのだと言えば、夫婦になれば意識も変わるものだと言われた。フィリアを愛しているのだと言えば、もう決まったことだから諦めなさいと言われた。

知っていた。両親は姪を愛していたけれど、マリィアの方をより気に入っていた。それはフィリアにはない無邪気さや明るさにあったのだろう。フィリアはマリィアと違って大人しかった。一歩後ろに下がって微笑むような女性だった。

「フィリアは言った。お前を幸せにしてくれと。私は答えた。不幸にはしないと」

「今の私が幸せなの!?」

「不幸ではないだろう」

「兄様がいないのに!?」

「子供達がいる。城でお前は慕われているし、両親にも可愛がられている。何不自由なく暮らしているだろう?そして未来の国母だ」

不幸ではないだろう。

これは不幸とは呼ばないだろう。

望まぬものを押しつけられているわけではないのだ。

けれどマリィアはくしゃりと顔を歪めた。

「帰って、きて。兄様、帰ってきて!子供達も待ってるわ!」

「私は死んだ身だ」

「生きてるわ」
「死んだ」

戦争だった。勝利して、誰もが歓喜に湧き、ようやくの終わりに安堵した隙に行方を断った。
戦場で誰がいつ死んだのか、どういう死に方をしたのか、それを覚えているものなどそういない。誰もが必死だった。生き延びることに必死で。そして疲れていた。
だから気づかれなかった。

戦場を駆ける姿を視界に映した覚えがあるものはいた。敵を屠る姿を見たものもいた。ただ、勝利の鬨が上がった時、その姿を見たものが誰一人としていなかった。
ようやく終わった戦争。姿が見えない王太子。探しても見つからないその姿。ヴィンラージが生きているのか、死んでいるのか、誰にも分からなかった。
それから十年だ。国は一向に見つからない王太子の死を発表した。
だからヴィンラージという王太子はもうこの世にはいない。

マリィアの目から涙が溢れる。
ドレスを握る手が震えている。

「…っ、なに、そんなに、リアが好きなの？」

ああ、知っていたのか、と思う。
知っているような気がしていた。フィリアが姿を消した時、心配する傍ら、安堵したように息をもらしたから、知っているのではないかと思っていた。

「愛している。全てを捨てても後悔したことがないほどに」

マリィアの目から涙が零れ落ちた。どうして、と叫ぶマリィアの髪が揺れる。フィリアと同じ髪の色。同じ目の色。よく似た容貌。フィリアが泣いているのではないか、と錯覚するほどに。
けれどヴィンラージは錯覚することなく、冷静にその姿を見る。心は揺れない。
何故なら目の前にいるのはマリィアであって、フィリアではない。
捨てた妻であって、最愛の人ではない。

「どうして…っ、私じゃだめなの！？私だってラージ兄様を愛してる！リアに負けないくらい愛してるのに！！」
「さあな。お前はフィリアじゃない。それだけだろう」
我ながら冷たい言葉だと思う。酷い言葉だと思う。けれど撤回する気はない。
大切な従妹だけれど、フィリアには代えられない。フィリアをこの腕に抱くために待っていたのだ。己に代わる王太子の誕生を。そして行方を眩ませる機会を。ずっとずっと待っていたのだ。
ようやくフィリアを腕に抱けた今を手放す気はない。そんな状況は許さない。そのためならば大切な従妹でも、血を分けた子供でも切り捨てる。

「……リア、は？リアは何て言ってるの」

マリィアが知るフィリアならば、と思うのだろうか。そこに光を見出したなら、マリィアはフィリアに会うつもりなのか。会ってヴィンラージを返せと言うつもりなのだろうか。
ヴィンラージと寄り添う姿を見るのが怖くて、こうして一人の時を狙ってきたのだろうに。
「フィリアが何と言おうと関係ない」
「関係あるわ！」
「ない。私は拒まれても、お前の元に戻れと言われても聞かなかった」
フィリアが泣いても、怒っても、決して聞かなかった。ただ愛しているのだと繰り返した。お前の側でなければ何者にも意味はないのだと繰り返した。
傷つけているのが分かっていたのに。それでも繰り返した。愛しているから。そして昔と変わらず愛されていることを知っていたから。
マリィアが放心したようにヴィンラージを見た。
ヴィンラージは無表情のままマリィアに告げる。

「私はフィリア以外はいらない。何も言わず、諦めて、そうして絶望するのはもう御免だ。もうこの手を離しはしない。何があっても」

残された森の中、近くで待たせていた侍従の声が聞こえる。
それを耳にしながら、マリィアの膝が崩れ落ちる。仰いだ空はマリィアの心とは裏腹に澄み切っていた。

欠片でもよかった。欠片でも取り戻せる希望があればよかった。それを支えに手繰り寄せるから。
けれどそんなものはなかった。どこにもなかったのだ。

知っていた。ヴィンラージとフィリアが両想いだということを。
知っていた。ヴィンラージに愛されていないということを。

けれど、知らなかった。
ヴィンラージが王位も立場も国も家族も友人も、何もかも捨てても構わないほどにフィリアを愛しているのだということを。

流れる涙は止まることがなく、延々流れ続ける。

悲しかった。
悔しかった。
苦しかった。
辛かった。
痛かった。
憎かった。

ああ、けれど。
これが報いなのだろうか。
愛する人と愛する従妹を傷つけ、引き裂いた報いなのだろうか。
従妹が泣くと知っていて。従兄が嘆くと知っていて。それでも我を通した報いなのだろうか。

遠く聞こえる鐘の音を聞きながら、ああ、この鐘の音をフィリアはどんな気持ちで聞いたのだろうと、今更に思った。

## 完結編

逃げたのだと言われれば否定はできない。
愛する人と愛する従妹が寄り添う姿を見続けることに耐えられなかった。
王妃の姪であり、王太子と王太子妃の従妹であるフィリアは、お茶会や夜会に呼ばれれば登城しないわけにはいかなかった。
従兄妹が結婚するまでは親しくつきあっていたのだ。突然距離を置くことなどできない。あまりに不自然だ。
だから何でもない顔をして登城して。何でもない顔をして二人に接して。部屋で一人泣く。
そんな日々に終わりを告げたかった。祝福しながらも、心のどこかではそうできない自分を見るのも嫌だった。
そのために必死に両親を説得して。いつの間にか冷静さを失って泣いて訴えていたので、一体何を言ったのかを覚えていないのだけれど、両親は頷いてくれた。
そうまでして一人、従兄妹の前から姿を消した、のに。

「今戻った、フィリア」
「ヴィ、おかえりなさい」

どうしてだろう。
ヴィンラージが追いかけてきた。何もかも全て捨てて、フィリアを追いかけてきた。
覚えたのは罪悪感。どうしてと泣いた。帰ってと怒った。なのにヴィンラージは聞かない。嫌だと言って抱きしめる。どんなに拒絶し

てもヴィンラージは退かなかった。

嬉しかった。
罪の意識を覚えながらも、嬉しかった。
愛する人が全て捨てて追いかけてきてくれたのだ。喜ぶ気持ちがないはずがない。
けれど、だ。けれど彼が持っていたものはかけがえのないものだ。
代えられるものなどない、大切な大切なものだ。

家族。
臣下。
王位。
国。

それら全てとフィリアがつり合うはずもない。
マリィアだっている。子供だっている。彼らが傷つき、涙するのだ。
フィリア一人のためにそうしていいものではない。

だから受け入れられず、拒み続けて。
そうして……受け入れた。

三年だ。
三年。
ヴィンラージを拒んだ年月。ヴィンラージが諦めなかった年月。負けたのはフィリアだった。ヴィンラージの背中に手を回してしまった。囁かれる愛に愛を返してしまった。下りてくる唇を受け入れてしまった。

罪深い。

従妹を裏切った。
従妹を、その子供達を傷つけた。
伯父と伯母から息子を奪った。
国から王太子を奪った。

それでも、もう手放せない。
一度手放した相手が、再びこの手にある。その幸福を味わってしまえば、もう離せない。

「フィリア」

ヴィンラージの大きな手に頬が包まれる。
目を上げればこちらを見る真摯な目にフィリアの姿が映っているのが確認できる。

「愛している」

近づいてくる顔に目を伏せて。
唇に触れる吐息に手を伸ばして。
絡まる指と指に力を込めて。

「私も愛してるわ、ヴィンラージ」

従妹の泣き声が聞こえた気がしたけれど、神殿の鐘の音に掻き消されて確かめる術を失くした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6010o/

祝福の鐘

2010年11月22日14時00分発行